

紀要

- 石器製作からみた矢柄研磨器という道具…………… 重田 勉 (1)
- 近江湖西地域の土師器
—古墳時代中期から後期にかけて—…………… 籠尾 拓幸 (7)
- 滋賀県内出土の須恵器貯蔵器1
—古墳時代中期を中心に—…………… 高島 悠希 (13)
- 志賀・中村狐塚古墳測量調査報告…………… 辻川 哲朗・福井 知樹 (24)
- 犬上川右岸における集落の変遷
—彦根市福満遺跡を中心として—…………… 中川 治美 (37)
- 高島郡出土の底部糸切り土師器に関する基礎的研究
—「皿化」についての一考察—…………… 川嶋 泰輔 (51)
- 中世観音正寺の中心伽藍について
—観音寺城と観音正寺その(4)—…………… 伊庭 功 (61)
- 近江地域の近世銭貨…………… 森田 真由香 (70)

38

高島郡出土の底部糸切り土師器に関する基礎的研究

— 「皿化」 についての一考察 —

川 嶋 泰 輔

目次

1. はじめに
2. 底部糸切り土師器の編年研究に関する動向
3. 底部糸切り土師器の変遷
4. 黒色土器と「て」字状口縁土師器の変化
5. 底部糸切り土師器をめぐる予察—まとめにかえて—

— 論 文 要 旨 —

回転台土師器は土器を回転台から切り離す際にヘラおこし、またはヘラ切りの痕跡がのこるのに対して、底部糸切り土師器とは回転台から切り離すときに糸の跡を有する土器のことを指す。

本稿では、高島郡から出土する底部糸切り土師器の変遷について試案を提示することを主たる目的とし、椀と皿の形態の変化に関する予察について記した。

まず、底部糸切り土師器の分布について、これまで刊行された報告書に記載されているものを中心に検討した。従来指摘されている見解と同様に、高島郡の弘川遺跡や正伝寺南遺跡から底部糸切り土師器が出土していることを確認した。

つぎに、底部糸切り土師器の変遷を検討した結果、10世紀後半から12世紀前半以降にかけての所産であることがあらたに判明した。器形は椀と皿とにわかれ、出土量が11世紀前半を境に変化している。その変化の要因は須恵器や回転台土師器の皿が生産されなくなったため、それを補填するかのように皿が増加したと筆者は考察する。その傍証に、台付皿や「て」字状口縁土師器の皿のほか黒色土器の皿の出現がみとめられる。

さらに、形態的な変化を注目するにあたり器高と口径の長さを測定した。椀は器高と口径ともに縮小する傾向に対して、皿は一定の数値に集中している。椀の小型化が時期を追うごとに認められるが、底部糸切り土師器の皿にはこの現象がみとめられない。

では、なぜ小型化が底部糸切り土師器の椀のみに生じるのか。それは皿の需要が増加したことで、椀が皿と同様の形態へと変化したからだと想定する。その根拠に共伴遺物の黒色土器の椀と「て」字状口縁土師器の皿は大きく変化することなく、むしろ定型化した状況があげられる。それに対して、底部糸切り土師器の椀は小型化して、皿との口径と器高の差は11世紀前半を境にみられずに、急激に皿の出土量が増加している。つまり、底部糸切り土師器の椀には皿化の現象が生じたと考える。

——— キーワード

古代末期から中世初頭 底部糸切り土師器 高島郡 椀と皿 皿化

1. はじめに

底部糸切り土師器は、土器を回転台から切り離すときに底部の下端に糸を巻きつけた跡を有する土師器のことを指す。その製作には、動力のある回転台が使用されたことが共通の見解となっている（中井 2022）。滋賀県内では高島郡を中心に分布し（森 1986、清水ほか 1990）、須恵器や緑釉陶器と共伴して出土している（図 1）（1）。共伴遺物の年代観をもとに、編年案が森隆氏や畑中英二氏によって提示された（森 1986、畑中 2007）。

本稿では底部糸切り土師器の変遷を辿り、形態の変化とその背景についてあきらかにすることを目的とする（2）。まずは、底部糸切り土師器にかんする編年研究を簡単にまとめ、出土資料の増加にともなって生じた課題について提示する（第 2 章）。つぎに、年代が判明できる共伴遺物から変遷案を作成して、器高と口径から形態の変化をしめす（第 3 章）。同様の分析を黒色土器の碗と「て」字状口縁土師器の皿にもおこない、その動向を提示する（第 4 章）（3）（4）。最後に、底部糸切り土師器の碗が小型化する背景について検討したい（第 5 章）。なお、対象遺物は高島郡出土のものに限る。

2. 底部糸切り土師器の編年研究に関する動向

（1）研究史

高島郡の中世土師器の編年研究の開始は、1980 年代ごろから出土事例が増加したことに起因している。一例をあげると、堀内明博氏と森氏の研究成果が該当する。堀内氏は高島市鴨遺跡・マキノ町小荒路十寺遺跡の成果を軸に、10 世紀後半から 11 世紀末にかけての編年案を作成し、森氏は弘川遺跡土器溜りなどの資料から 9 世紀から 11 世紀にかけての編年案を作成した（堀内 1986、森 1986）。森氏は底部糸切り土師器が回転台土師器の一種であり、須恵器からの技術系譜が窺えると主張した。あわせて、底部の糸切りをおこなうなどの須恵器の製作技術を継承する生産体制は 9 世紀中葉を境に顕在化し、10 世紀末頃にかけて衰退すると提示している（森 1986）。

1990 年代に入ると、清水尚氏らは新旭町内の調査事例をもとに 11 世紀から 13 世紀にかけての土器組成とその背景に言及した。高島市正伝寺南遺跡 SD10 からは、石川県小松市漆町遺跡と同様の痕跡を有する底部糸切り土師器が出土していること、滋賀県内の底部糸切り土師器は湖北から高島市内の一部の地域に限られ、その生産遺跡はみあたらないこと、さらには底部糸切り土師器が北陸に強い影響を受けた、あるいは北陸地方からの搬入品であることなどを指摘した（清水・林・大崎 1990）。

2000 年代には、森氏が提唱した回転台成形土師器の製作技術やその系譜について畑中氏が指摘する（畑中 2006・2007）（5）。回転台成形土師器は弘川遺跡土器溜りから 9 世紀中葉にかけて暗文土師器にとって代わって出現し、そ

の技術は須恵器ではなく暗文のついた土師器へとうけつがれるとした。くわえて、10 世紀前半から 11 世紀前半にかけての底部糸切り土師器の変遷についても提示した（畑中 2007）。

（2）課題の抽出

以上、主に底部糸切り土師器の編年研究を中心に振り返った。森氏は底部糸切り土師器の実態に関して、出土事例が希薄のため把握することが困難であると主張した（森 1986）。のちに 10 世紀から 11 世紀にかけての編年案を畑中氏が作成している（畑中 2007）。しかしながら、近年では新出資料の蓄積が窺える。上記の動向を鑑みて、底部糸切り土師器の変遷を中心に、底部糸切り土師器の碗が小型化する背景の分析を試みたい。その作業は以下のとおりである。

- ① 底部糸切り土師器の変遷を整理し、各時期の特徴を示す（第 3 章）。
- ② 同時期の黒色土器の碗と「て」字状口縁土師器の皿に関する形態の変化を明示する（第 4 章）。
- ③ 碗が小型化する要因について分析する（第 5 章）。

3. 底部糸切り土師器の変遷

（1）分析方法

分析は、型式分類と資料の配列により変化を追求する方法を用い、型式分類は土器の形態の特徴を軸として、技術的属性にも考慮しなければならない。本稿では、形態の特徴を軸に器形を特定する。具体的には皿よりも器高が高く、かつ口縁部にかけて丸みのあるものを碗、平底で口縁部が斜め上にひらくものを杯とした。板状またはそれに近い形状で杯よりも底部が低い器のことを皿としている。なお、皿に高台が付属するものを台付皿とした（吉田 2011）。

この器種の分類を手掛かりに、発掘調査報告書に記載された資料のうち、一括資料およびそれに準ずる資料を抽出して、型式の組成が近いもの同士が近くなるように組成した（図 2・図 3）。これを軸として、土器の種類と器種構成ならびに形態の変化について追及したい。

（2）土器の種類と器種の変遷

先述した分析方法から、一括資料およびそれに準ずる資料を配列した（図 2、図 3）。結果として、9 世紀前半から 12 世紀前半までを 7 つの時期に設定した。土器の種類は 9 世紀後半まで須恵器が主流であったのに対して、10 世紀前半になると土師器生産の比率が高くなる（図 4）。10 世紀後半には底部糸切り土師器の器形は碗と皿のみとなり（図 5、図 6）、同様の傾向が底部糸切り土師器にも認められる（図 7）。10 世紀後半にはあらたに「て」字状口縁土師器が出現している（図 8）。ここでは資料の制約上、底部糸切り土師器が出現する 10 世紀前半から 12 世紀前半

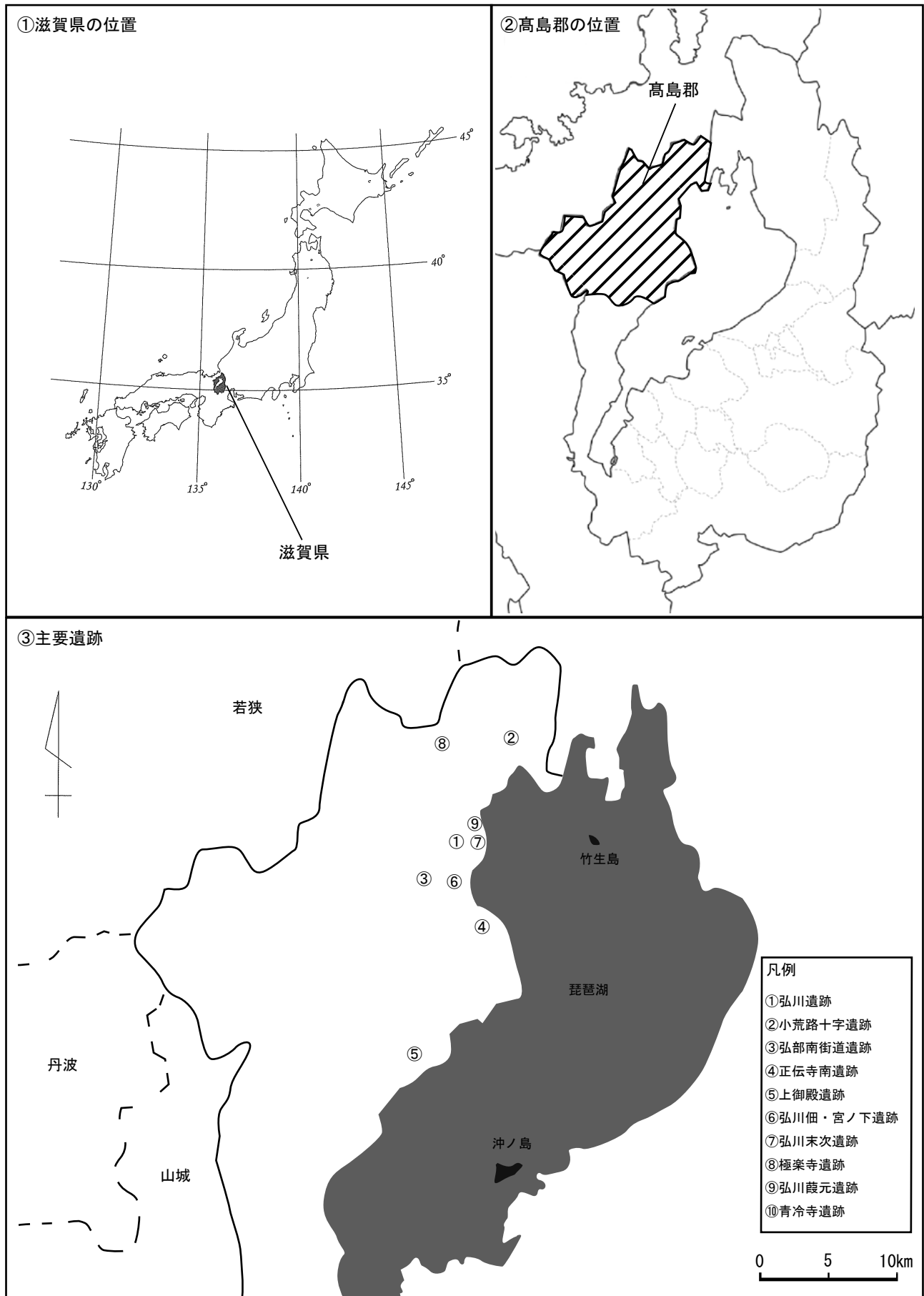


図1 底部糸切り土師器の分布図

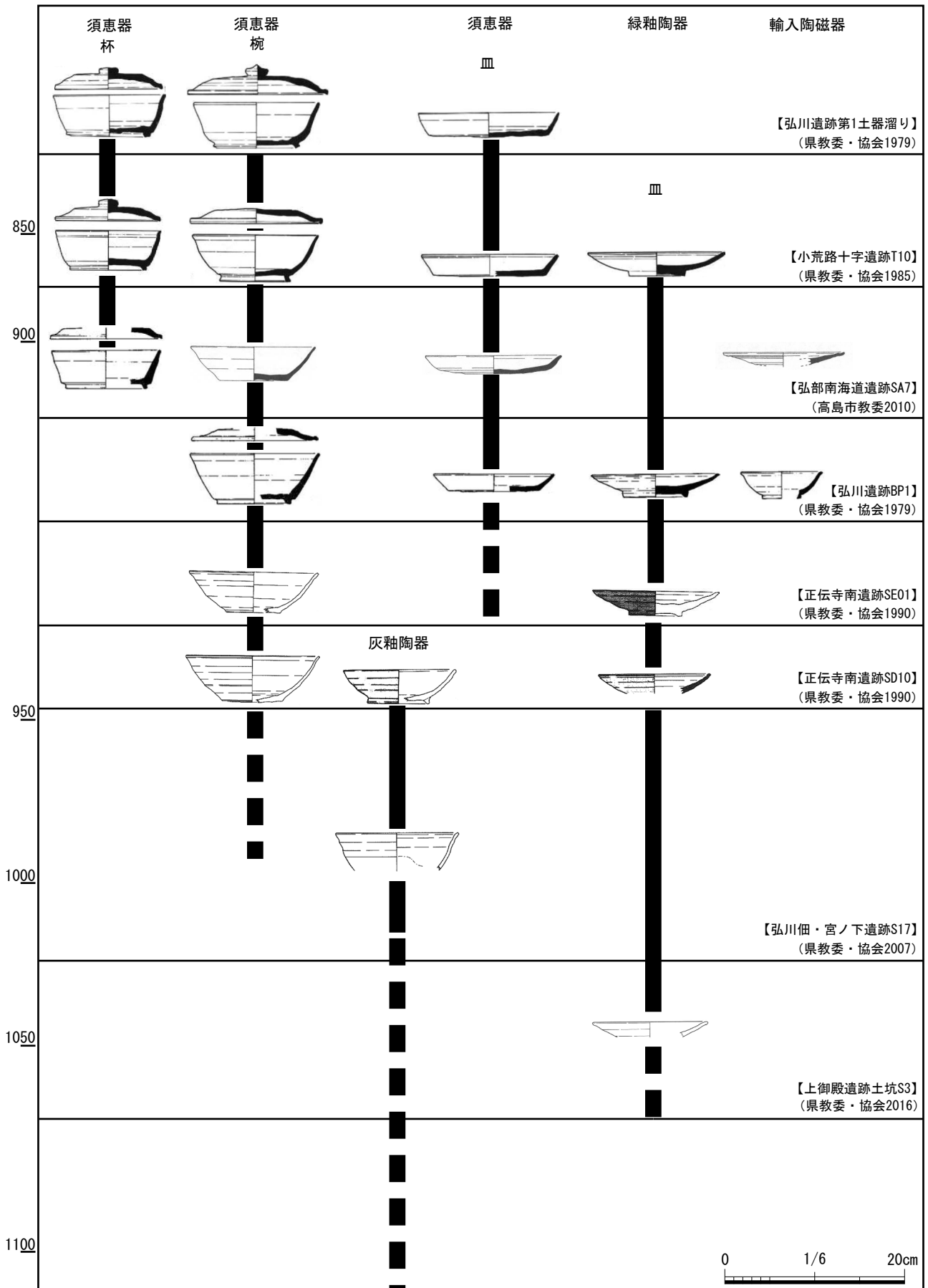


図2 高島郡出土の供膳具の変遷

に絞って各時期の特徴をまとめたい。

10 世紀前半 須恵器や緑釉陶器のほかに回転台土師器も共存して、あらたに灰釉陶器が出現する（図 4）。当該期にかけては碗や皿のほかに蓋や杯が出現し、碗の占める割合が増加している（図 5）。それと同様の傾向が土師器や底部糸切り土師器にも読み解ける（図 6・図 7）。

10 世紀後半 回転台土師器や須恵器が消滅して、あらたに黒色土器や「て」字状口縁土師器、底部糸切り土師器の台付皿が出現する（図 4）。主要な器形は碗と皿のみとなり、前時期と比べて皿の占める割合が高くなる（図 5）。底部糸切り土師器に関しては、前時期と同様に皿よりも碗の数が多い（図 7）。

11 世紀前半 土器の種類は前時期とかわらず、須恵器・緑釉陶器・土師器である（図 4）。全体として皿よりも碗の占める割合が高いが、底部糸切り土師器では一転して皿が多くなる（図 6）。「て」字状口縁土師器の割合も前時期と比べてふえている（図 8）。

11 世紀後半 11 世紀前半と同様に土器の種類と器種は変わらない。前時期と比べて、皿の割合が増加している。この特徴は底部糸切り土師器でも同様の特徴を認めることができる。

12 世紀前半 緑釉陶器が消滅し、あらたに黒色土器の皿が出現する（図 4）。対象資料数が少ないため、この時期の特徴を示しているといいきれない。しかしながら、器種構成は碗よりも皿の占める割合が高い（図 6・図 7）。

以上、確認してきたように、10 世紀後半には須恵器と回転台土師器が消滅し、11 世紀後半以降は緑釉陶器が出土しない（図 4）。10 世紀前半までは蓋や杯といった器形は作成されたが、10 世紀後半以降では碗と皿のみとなる（図 5・図 6）。なかでも、底部糸切り土師器は 10 世紀前半から 12 世紀前半にかけて作成され、11 世紀前半になると皿の占める割合が高くなる（図 7）。それと同時に、あらたに底部糸切り土師器の台付皿も出現している（図 3）。つまり、皿が急激に増加した背景の一つには台付皿の出現が要因としていえよう。多少の増減があるものの継続して皿が生産される様子がうかがえる。

（3）形態の変化

最後に、時期区分をもとにして形態の変化について確認する。まず、底部糸切り土師器の碗と皿を取り上げる。横軸には口径を縦軸には器高を測定した散布図を作成し、碗や皿の器種に分けて分析をおこなった（図 9・図 10）。

全体的な傾向として、碗は 10 世紀前半から 12 世紀前半にかけて全体として右上から左下へ移る様子を確認できる（図 9）。器高は時期が下ると、縮小している（図 11）。それに対して、一部例外はあるもの皿は 9.0cm～10.8cm と一定の数値に集中した動向がみてとれる（図 10）。

碗は 10 世紀前半から 12 世紀前半にかけて小型化し、と

くに 11 世紀前半では皿と同様の器高へと変化する（図 9、図 10）。11 世紀前半は底部糸切り土師器の碗が減少して、皿が増加している（図 7）。そのため、皿の生産量が増加した時期だと筆者は考察する。

4. 黒色土器と「て」字状口縁土師器の変化

（1）器種の変遷

黒色土器は 11 世紀後半から 12 世紀前半を中心に出現し、主要な器形は碗である。12 世紀前半にはあらたに皿が出現している（図 3）。この傾向は土師器や底部糸切り土師器と同様に皿の需要が増加したためだといえる（図 6・図 7）。

「て」字状口縁土師器は供膳具の一種として、10 世紀後半から 11 世紀後半にかけて出土している。土師器の皿が増加した時期と同時期に生産され、その数は増加している。なお、その器形は皿のみである。

（2）形態の変化

底部糸切り土師器と同様に器高と口径について分析した（図 12・図 13）。対象時期は 10 世紀後半から 11 世紀後半にかけてである。分析結果から、黒色土器と「て」字状口縁土師器の両者とともに定型化した様子がうかがえる。

まとめると、底部糸切り土師器の碗は時期が下るにつれて、器高と口径ともに縮小化する。それに対して、皿はその傾向がみえない。したがって、器種によって小型化が生じるのではなく、この現象は底部糸切り土師器の碗のみに生じたと筆者は考察する。

5. 底部糸切り土師器をめぐる予察—まとめにかえて—

本稿では、高島郡における底部糸切り土師器の変遷について分析を試みた。以下に予察として、底部糸切り土師器の碗について考えるところを述べたい。編年案を参照すると、森氏は 9 世紀後半から、畑中氏は 10 世紀前半から、高島郡を中心に底部糸切り土師器が展開したとしている（森 1986、畑中 2007）（6）。正伝寺南遺跡 SE01 からは底部糸切り土師器の碗と皿が出土するが、碗は須恵器に類似した器形との印象をうける（図 2・図 3）。これは、供膳具の須恵器生産が終息するために形態が模倣した可能性があるといえるのではないだろうか（図 14）（7）。その傍証に、9 世紀後半までは須恵器が主流であったのに対して、10 世紀前半になると土師器が数多く生産されること（図 4）、須恵器生産や回転台土師器の終了にともない、多くの底部糸切り土師器が作成されたことがあげられる（図 8）。

また、底部糸切り土師器は碗や皿のみで構成されるのではなく、あらたに台付皿も出現する（図 3）。底部糸切り土師器の生産時期については、畑中氏によって 10 世紀前半から 11 世紀前半までと提示された（畑中 2007）。その

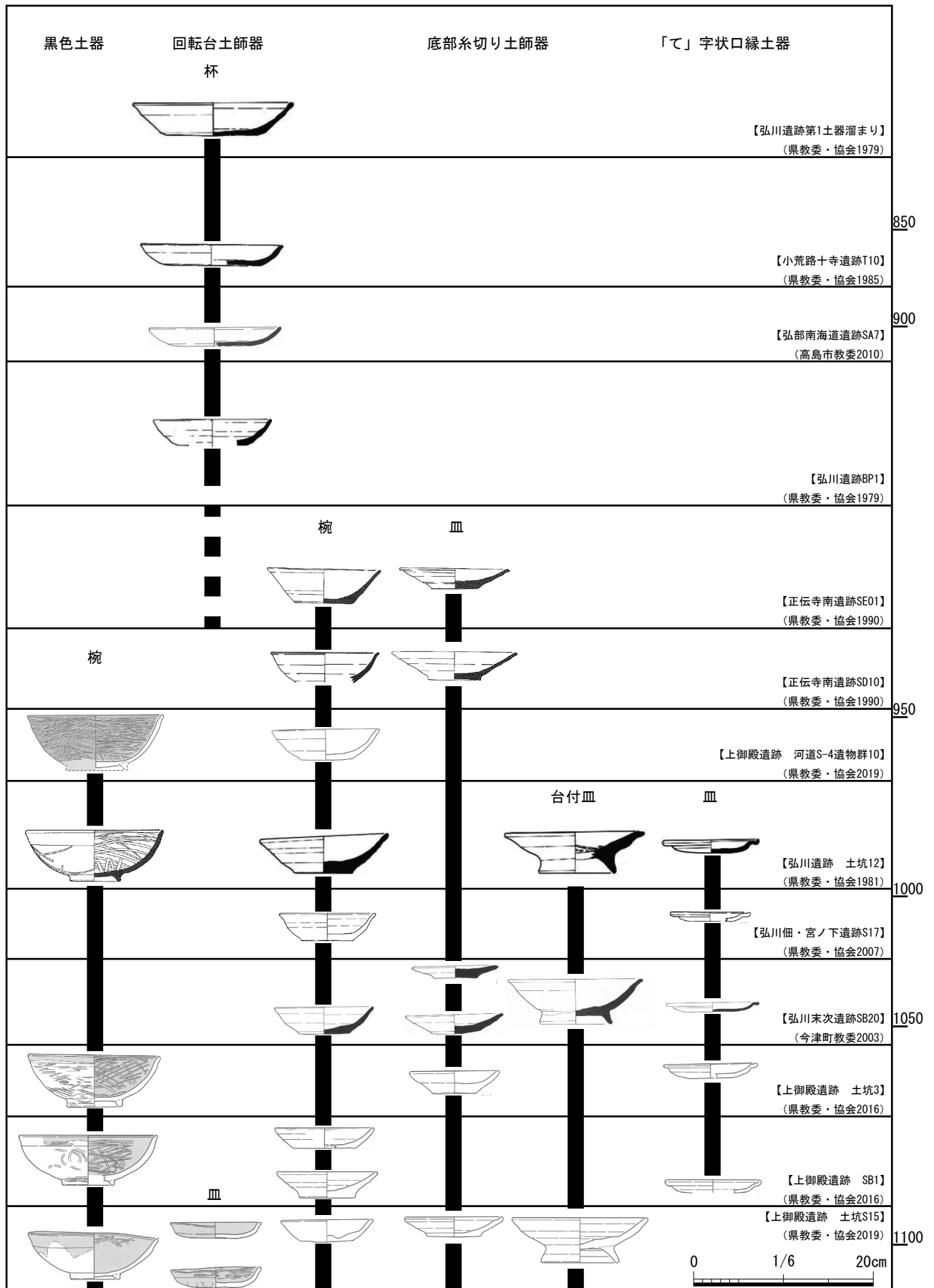


図3 高島郡出土の供膳具の変遷

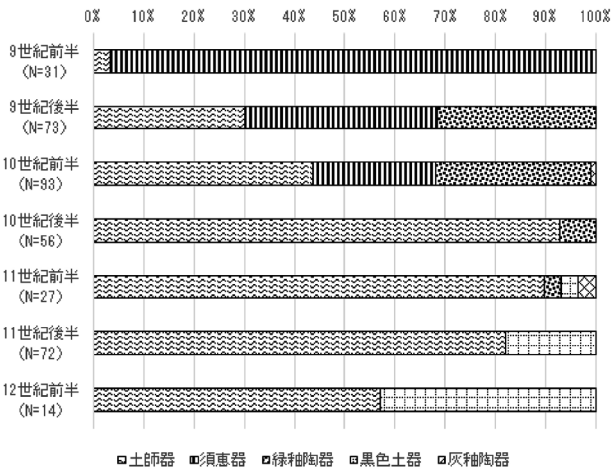


図4 土師の種類の変遷

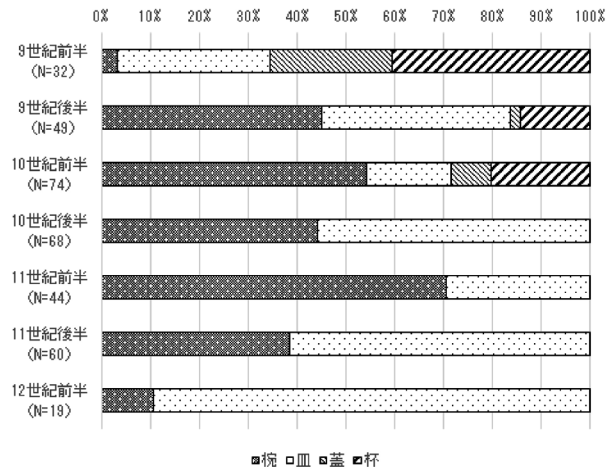


図5 各器形の比率

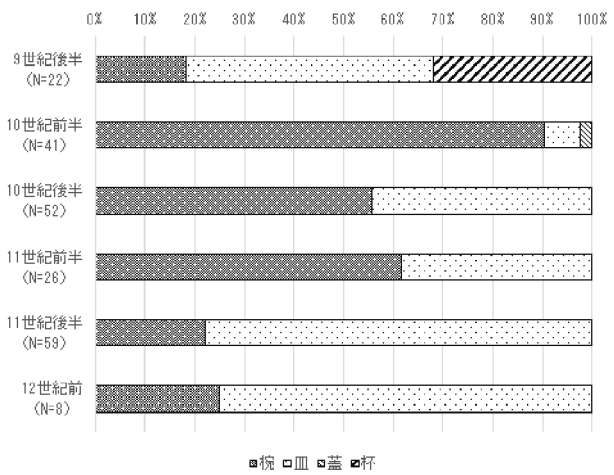


図6 土師器の各器形の比率

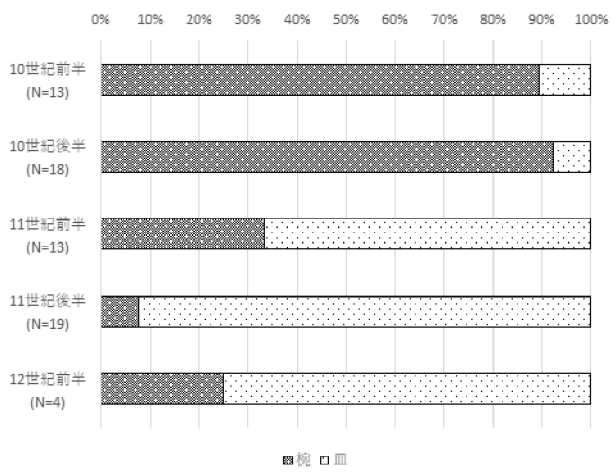


図7 底部糸切り土師器の碗と皿の比率

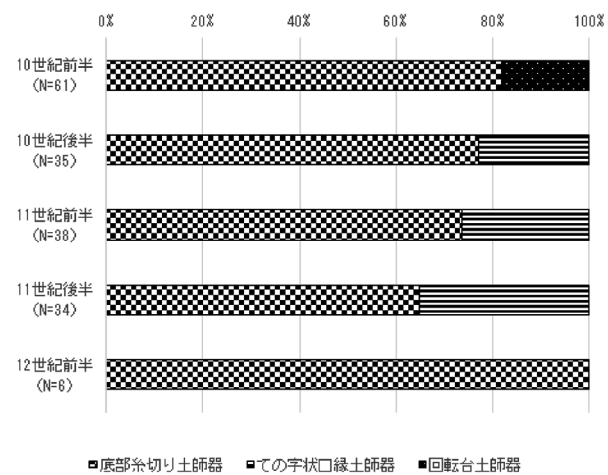


図8 供膳具の変遷

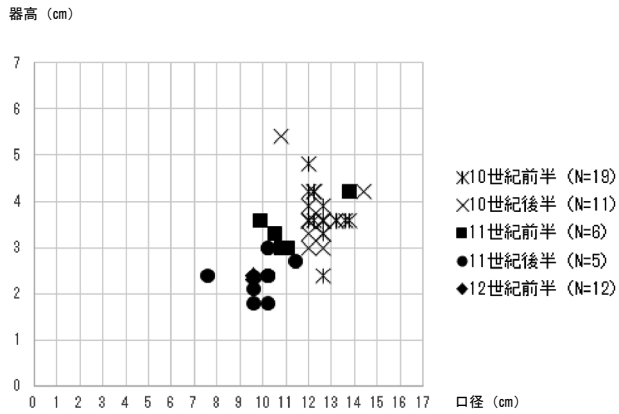


図9 底部糸切り土師器の法量分布（碗）

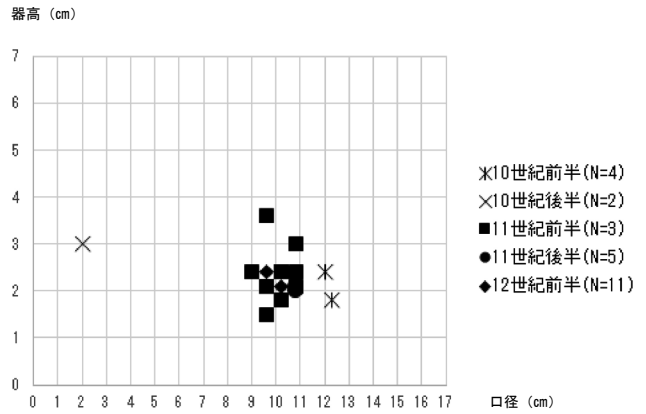


図10 底部糸切り土師器の法量分布（皿）

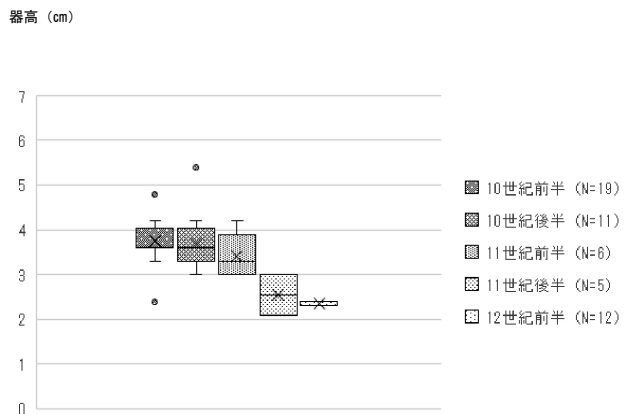


図11 底部糸切り土師器の器高の変遷（碗）

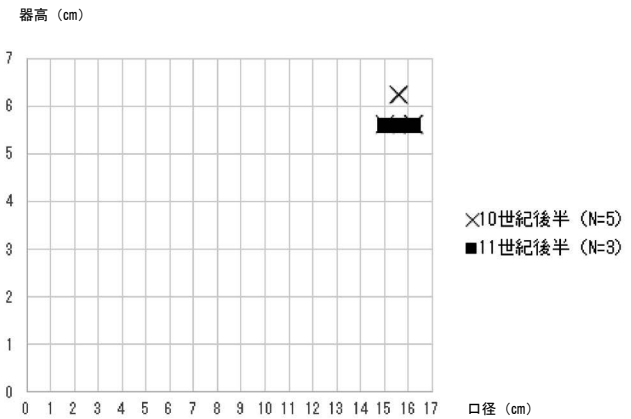


図12 黒色土器の法量分布（碗）

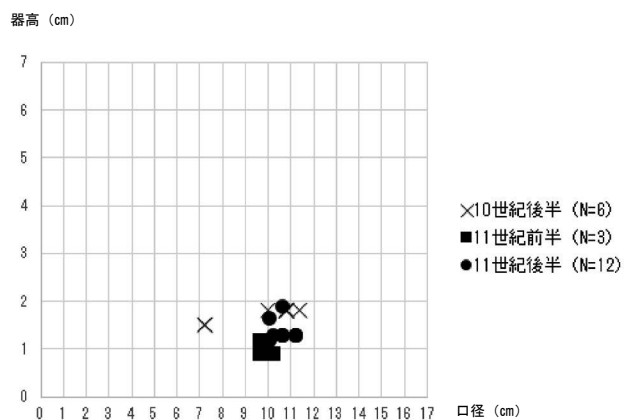


図13 「て」字口縁土師器の法量分布（皿）

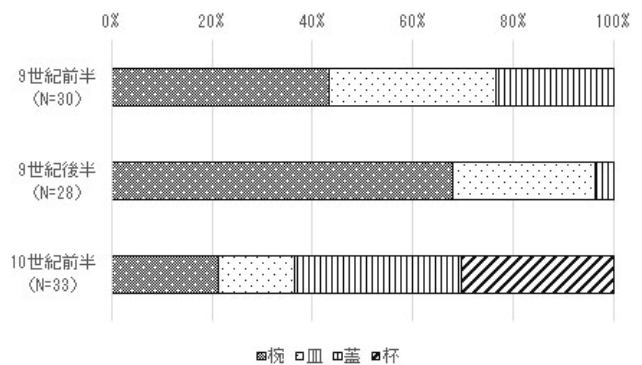


図14 須恵器の各器形の比率

後の資料数の増加にともない、10 世紀前半から 12 世紀前半以降にも生産されていたことがあらたにわかった。先述したように、10 世紀後半からは台付皿が含まれ、11 世紀前半を画期に底部糸切り土師器の皿がふえている（図 7）。

では、なぜ 11 世紀前半を境に底部糸切り土師器の皿が増加するのか。その要因には共伴遺物の「て」字状口縁土師皿の増加と台付皿の出現があげられる（図 8）。10 世紀後半には、「て」字状口縁土師器が出土している（図 8）。背景には、供膳具のなかでもとくに皿の需要がより多く求められていたからだと想定できる（図 5）。その傍証に、12 世紀前半にはあらたに黒色土器の皿が出土している（図 3）。

もう一つは、底部糸切り土師器の椀が小型化して皿と類似した形態を呈していることである（図 9・図 10）。底部糸切り土師器の各器種の器高と口径の長さについて分析した。椀は縮小化するが、皿はその動向がよみとれない。共伴する黒色土器の椀や「て」字状口縁土師器の小型化は読み取れず、むしろ定型化している（図 12・図 13）。器種の違いにより小型化するのではなく、底部糸切り土師器の椀のみに生じていた。

まとめると、土師器生産は 10 世紀前半を最盛期とし、この時期に底部糸切り土師器の生産が開始される（図 4・図 7）。それと同時に、須恵器の供膳具生産が終焉へと向かって、10 世紀後半以降には出土しない（図 14）。あらたに 10 世紀後半には「て」字状口縁土師皿が出現し、底部糸切り土師器の皿も 11 世紀前半になると増加している（図 8）。

また、器高と口径について分析を進めると、11 世紀前半から底部糸切り土師器の椀の小型化がうかがえる（図 9・図 10）。その現象は皿の需要の増加に伴って形態的な変化が生じたと筆者は考える。つまり、法量分布と器種の変遷を軸に分析を進めると、底部糸切り土師器の椀は皿化の現象が起きた可能性があるといえよう（8）。

以上、可能性の指摘に終始して論理的な議論の展開ができていないが、底部糸切り土師器の椀の小型化について思うことを述べた。今回、課題は多いが、高島郡を中心に出現する底部糸切り土師器の意味についても稿をあらためて論じることを期して、ひとまずは本稿をおえることにしたい。

〔謝辞〕

遺物の実見にあたり高島市教育委員会教育総務部文化財課の西悠太郎氏にはお世話になった。未筆ではあるが、感謝の意を申し上げたい。

註

（1）底部糸切り土師器は高島郡を中心に出土しているが、湖東の愛知郡愛荘町長野遺跡や近江八幡市阿弥陀寺遺跡からも令和

6 年度に当協会が実施した発掘調査で出土している。調査担当者の木下義信氏と三好祐佳氏、阿刀弘史氏からご教示いただいた。

（2）高島郡とは現在の高島市域を指す用語とする

（3）「て」字状口縁土師器とは京都産土師器の一種であり、端部を水平に折り曲げて断面を「て」字状に仕上げた特徴を有する（中井 2023）。

（4）黒色土器は土師器の一種で器面にヘラ磨きをして炭素を吸着させたものを指し、県内からは 12 世紀以降も継続して内面に黒化処理を施した近江型黒色土器が生産される（森 1986）。

（5）森氏は回転台成形土師器を回転台から土器を切り離す際に低速でヘラおこし、またはヘラ切りの痕跡を有する酸化焰焼成の土器とした（森 1986、1993）。それに対して、畑中氏は回転台成形土師器には指圧痕や掌握痕がみられ十分に練り切れていない流文の痕跡等があることから、回転台ではなく、むしろ手びねりで作成されたことを主張した（畑中 2006）。

（6）底部糸切り土師器の出現時期については各論者でことなる。森氏は鴨遺跡 10 トレンチ遺物包含層から出土した資料をもとに 9 世紀後半、畑中氏は正伝寺南遺跡 SE01 から 10 世紀前半としている（森 1986・畑中 2007）。遺物包含層という一括性が担保できない遺構の性格から、本稿では畑中氏と同様に 10 世紀前半が底部糸切り土師器の出現期だと想定する。

（7）須恵器に関しては 10 世紀後半の弘川遺跡（滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会 1979）、11 世紀前半の上御殿遺跡から甕や壺の貯蔵具が出土する（滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会 2016）。今回は碗や杯などの供膳具を軸に分析を試みた。

（8）皿化とは椀の器高と口径の長さが皿と遜色のない大きさとなる傾向のことを指す。ここでは、端部形態や製作技術については考慮しない。

文献（著者名・機関名 50 音順、刊行年順）

【報告書】

安曇川町教育委員会（1995）『下五反田遺跡発掘調査報告書』

今津町教育委員会（2003）「弘川末次遺跡発掘調査概要報告書」『今津町文化財調査報告書 28 集』

今津町教育委員会（2004）「弘川佃・善元遺跡発掘調査概要報告書」『今津町文化財調査報告書 29 集』

滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会（1978）『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅴ』

滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会（1979）『弘川遺跡発掘調査報告書』

滋賀県教育委員会・高島町教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会（1980）『鴨遺跡』

滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会（1980）『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅶ-4』

滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会（1981）『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅶ-3』

滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会（1982）『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅸ - 2』

滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会（1983）『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅹ - 3』

滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会（1985）『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅺ - 8』

滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会（1990）『一般国道 161 号線（高島バイパス）建設に伴う新旭町内遺跡発掘調査報告書 正伝寺南遺跡』

滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会（2004）『下五反田遺跡』

滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会（2016）『上御殿遺跡』

滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会（2016）『上御殿遺跡』 2

滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会（2019）『上御殿遺跡』 3

新旭町教育委員会（2004）「新旭町遺跡調査報告書」『新旭町文化財調査報告書第 5 集』

新旭町教育委員会（2004）「正伝寺南遺跡発掘調査報告書」『平成 15 年度 新旭町文化財調査報告書第 7 集』

高島市教育委員会（2007）「高島市内遺跡調査報告書 平成 18 年度」『高島市文化財調査報告書第 6 集』

高島市教育委員会（2010）「弘部南海道遺跡」『高島市文化財調査報告書 15 集』

高島市教育委員会（2014）「高島市内遺跡調査報告書 平成 25 年度」『高島市文化財調査報告書 22 集』

高島市教育委員会（2020）「法連寺・太田町遺跡発掘調査報告書」『高島市文化財調査報告書第 37 集』

【論文等】

宇野隆夫（1981）「遺物の観察」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ』京都大学埋蔵文化財研究センター

小森俊寛・上村憲章（1996）「京都の都市遺跡から出土する土器の編年の研究」『研究紀要』第 3 号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所

清水 尚・林 敦子・大崎靖子（1990）「新旭町における平安時代土器の諸様相」『一般国道 161 号線（高島バイパス）建設に伴う新旭町内遺跡発掘調査報告書 正伝寺南遺跡』滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会

高島町（2003）『図説 高島町の歴史』高島町史編さん委員会

高橋照彦（1994）「近江産緑釉陶器をめぐる諸問題」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 57 集 国立歴史民俗博物館

田嶋明人（1986）「9 世紀後半から 13 世紀にかけての土師器の変遷」『漆町遺跡Ⅰ』石川県埋蔵文化財センター

中井淳史（2022）『中世かわらけ物語 もっとも身近な日用品の考古学』吉川弘文館

中井淳史（2022）「土師器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

西中久典（2019）「大津市内出土の白色土器」『淡海文化財論叢第十一輯』淡海文化財論叢刊行会

橋本久和（2022）「中世土器の成立」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

畑中英二（2006）「所謂回転第土師器の製作技法について」『淡海文化財論叢第一輯』淡海文化財論叢刊行会

畑中英二（2007）「所謂回転第土師器の編年について」『淡海文化財論叢第二輯』淡海文化財論叢刊行会

平尾政幸（2019）「土師器再考」『洛史 研究紀要』12 号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所

堀内明博（1986）「平安時代中・後期の土器組成」『中近世土器の基礎研究Ⅱ』日本中世土器研究会

森 隆（1986）「滋賀県における古代末・中世土器」『中近世土器の基礎研究Ⅳ』日本中世土器研究会

森 隆（1988）「近江地域出土の古代末期の土器群について」『中近世土器の基礎研究Ⅱ』日本中世土器研究会

森 隆（1993）「土器碗の生産と流通」『中近世土器の基礎研究Ⅸ』日本中世土器研究会

横田賢次郎・森田 勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集 4』九州歴史資料館

横田洋三（1988）「中世土師皿と生産地」『紀要』1 号 財団法人滋賀県文化財保護協会

吉田恵二（2011）「杯」「皿」「碗」、『佐原真・田中琢編 日本考古学事典』

挿図典拠

図 1 国土地理院 1/25,000 地形図「海津」・「熊川」・「今津」・「勝野」・「北小松」により川嶋が作成。

高島町 2003 より川嶋がトレース。

図 2～図 14 川嶋が作成。

（かわしま たいすけ：調査課 技師）

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage
Vol.38 2025.3

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages